



日本植物病理学会ニュース 第113号

(2026年2月)

【学会活動状況】

○令和7年度北海道部会開催報告

令和7年度日本植物病理学会北海道部会では、道民活動センターかでの2・7を会場として、10月9日(木)に第231回談話会、10日(金)に一般講演が開催された。68名に参加いただいた。談話会では「北海道におけるコムギおよびエンバクの最近の病害とその対応」をテーマに3名の方に講演いただいた。さらに特別講演として広島大学の久我ゆかり先生に「真菌にみる共生のメカニズム：菌根における物流と白紋羽病温水処理による相乗的衰退」について講演いただいた。これまで北海道部会ではこうした研究に触れる機会も少なかったため、刺激を受けた参加者も多かったのではないと思われる。一般講演では17題の講演があり、内訳は菌類病7題、細菌病1題、ウイルス病9題であった。また、総会では令和6年設立の木村郁夫記念北海道植物病害防除功労賞を受賞した池谷(齊藤)美奈子氏に、これまで携われた研究の成果を講演いただいた。次年度の北海道部会は10月8日(木)～9日(金)札幌周辺での開催を予定している。(山名利一)

○令和7年度東北部会開催報告

令和7年度(第61回)日本植物病理学会東北部会は、9月18日、19日に、秋田県立大学生物資源科学部(秋田県秋田市)にて開催され、一般38名、学生22名(合計60名)の参加があった。講演発表は、糸状菌病7題、ウイルス・ウイロイド病6題、植物保護3題の合計16題、および令和5年度に日本植物病理学会東北部会地域貢献賞を受賞された秋田県果樹試験場の佐藤裕氏の特別講演1題であり、活発な議論と意見交換がなされた。幹事会・総会では次年度部会長は昨年度に引き続き、弘前大学農学生命科学部の田中和明氏が選出された。また、本年度の地域貢献賞は、福島県農業総合センターの堀越紀夫氏「福島県における園芸作物に発生する病害の診断・同定と防除に関する研究」に授与された。初日の一般講演後には、ANAクラウン

ラザホテル秋田にて情報交換会が開催された。田中和明部会長からご挨拶と乾杯のご発声をいただき、29名の参加者により活発な情報交換がなされ親睦が深められた。令和8年度は岩手県での開催が予定されている。(戸田 武)

○令和7年度関東部会開催報告

令和7年度日本植物病理学会関東部会は、2025年9月11日、12日に東京農工大学(東京都府中市)にて開催されました。参加者は合計174名で、その内訳は一般会員80名、一般非会員16名、学生会員49名、学生非会員29名であり、昨年比20%増となりました。

一般講演では43題の口頭発表があり、その内容は菌類病、細菌病、ウイルス・ウイロイド病、感染生理関連、植物保護関連など多彩でした。また質疑応答では活発な議論が交わされました。学生優秀発表賞には本年度は24名のエントリーがあり、喜田 玲さん(東京理科大学大学院 創域理工学研究科)「イネいもち病菌における Pro1 転写因子機能変異による不稔化は長期培養により生じる適応進化株と同等の競合優位性を付与する」、Newfeld Jacyさん(東京大学大学院 総合文化研究科)「病原菌特異的転写因子を介した病原性の制御は宿主のリン欠乏応答遺伝子に依存する」、田中 聡大さん(信州大学大学院 総合理工学研究科)「炭疽病菌群の侵入を阻止するシロイヌナズナの非宿主抵抗性構成因子の同定とその重層構造」、氏松 蓮さん(東京大学大学院 総合文化研究科)「シロイヌナズナトリプトファン由来抗菌物質代謝経路による内生糸状菌 *Colletotrichum tofieldiae* の病原性抑制機構」、有井 鈴花さん(東京農工大学大学院 農学府)「多犯性卵菌 *Phytophthora capsici* に感染する新規ウイルスの性状解明」の5名が受賞されました(発表順)。

情報交換会は、新たに東京農工大学に開所した西東京国際イノベーション共創拠点にて開催され、会場の収容人数いっぱい93名が参加しました。夏秋知英名誉会員より乾杯のご発声をいただき、活発な情報交換がなされ賑やか

に親睦が深められました。会の最後には、佐藤豊三氏からご挨拶をいただき閉会となりました。

2日目の9月12日の午後には、同会場にて第20回若手の会が開催されました。参加者は92名でした。新屋 良治氏（明治大学農学部）、平田 梨佳子氏（京都大学 農学研究科）、藤川 貴史氏（農研機構 植物防疫研究部門）、野元 美佳氏（名古屋大学 遺伝子実験施設）から研究およびキャリアについてのご講演をいただき、活発な質疑応答が行われました。講演会終了後には学内の生協ホールで情報交換会が行われ、学生・若手参加者が料理を楽しみつつ賑やかに親睦を深める様子が見られました。

関東部会は2年間にわたり東京農工大で開催し、この2年間で参加者はそれ以前に比べ50%増、演題数は40%増となりました。関東地域の会員のみなさまのご協力に心より感謝いたします。令和8年度関東部会は明治大学で開催予定です。引き続き活発な部会となるようご協力をよろしく願います。（有江 力）

○令和7年度九州部会開催報告

令和7年度の日本植物病理学会九州部会は、11月20日（木）～21日（金）の日程で沖縄県立博物館講座室をお借りして対面形式で開催しました。参加人数は57人（一般会員36名、学生会員13名、非会員8名）で、発表演題数は25題でした。一般講演では、各地域で課題となっている病害の様々な研究成果が発表されました。とりわけ、サツマイモ茎根腐細菌病に関しては農研機構、宮崎県および鹿児島県からそれぞれ講演がなされ、本病が九州南部のサツマイモ産地の新たな課題となっている状況が浮き彫りになりました。また、九州外からの参加ではありますが、ウイルス病に対する沖縄の月桃に由来するプロアントシアニンに関する話題や、マンゴー炭疽病やバナナ萎凋病などの発表もあり、いかにも九州部会らしい内容の発表会となりました。部会総会は21日9:00より開催しました。予め20日の講演終了後の役員会で諮った議案を総会にかけて質疑を受けたところ、全ての議案について承認を頂きました。また、本年度の九州部会地域貢献賞として、山崎修一博士（大分農技セ）が受賞されることを報告したほか、令和10年度の日本植物病理学会大会を宮崎市で開催すること、オール九州で開催に向けた取り組みを進める旨をアナウンスし、部会員の皆様に協力をお願いしました。21日の発表会終了後に行われた地域貢献賞受賞講演会は、山崎博士より「園芸作物のウイルス病及び細菌病の防除技術に関する研究」という演題で約40分間の講演をいただきました。質疑の中で、長年にわたる研究活動の動機として



写真 九州部会・講演発表会の様子

「県の病害対策に携わる者としてのプロ意識」を強調されていたことが印象に残りました。会場の若手研究者や学生の皆様の心にも響いたのではないかと思います。末筆となりましたが、部会開催にあたりご尽力いただいた沖縄県の皆様、並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。

なお、情報交換会を20日18:30から那覇市内の飲食店で開催したところ30人の参加をいただき、沖縄料理とエイサー(?)を堪能しながら各々昼間の議論を深め、11月にしてはアツい夜となりましたことを追記します。

（菅 康弘）

○第15回植物病害診断研究会

第15回植物病害診断研究会が、令和7年10月7日に三重県津市のアスト津で開催された。前回は令和4年のオンライン開催で、対面での開催は令和元年以来6年ぶりとなった。参加者の減少も懸念されたが、関係者の努力により99名（会員62名・非会員37名）の方に参加いただいた。参加者の所属別内訳は、大学7名、農研機構7名、都道府県関係31名、企業50名、その他団体4名であり、植物病害診断業務に関連する方々の参加が多く見受けられた。研究会では、計8題、9名の演者による講演と総合討論が行われた。まず、「病害診断サービスと病害診断に係る基本的知識」に関連して、(株)農研植物病院の辻田理紗氏、農研機構植物防疫研究部門の松永航氏から「輸出入検疫および国内流通向け自主検査のための病害虫・雑草診断サービス」と題して輸出検疫および国内流通検査サービス事業の概要、農研機構の研究成果の社会実装の事例について講演いただいた。(株)東海テクノの永尾桂三氏からは、植物防疫法の改正に伴う、輸出検疫に係る登録検査機関としての検査サービスの概要について講演いただ

いた。三重大学大学院生物資源学研究科の中島千晴氏から「病害診断時に必要な病原糸状菌の分類に関する知識，近年の病害診断事例」と題して，なぜ学名が変更されるのか，分子同定・診断とその結果の理解の仕方について，最近の現地課題を交えて講演をいただいた。農研機構野菜花き研究部門の杉山充啓氏からは，「ウリ科野菜のウイルス病抵抗性品種の育成」と題し，黄化えそ病抵抗性キュウリ品種および退緑黄化病抵抗性メロン品種とその育成過程について講演いただいた。次に，「各県の病害診断事例と人材育成」に関連して，岡山県農林水産総合センターの桐野菜美子氏からは，岡山県における病害診断の実態や「農作物障害診断アシストシステム」を用いた人材育成事例について詳細に説明いただき，愛知県経済農業協同組合連合会の松崎聖史氏からは，「JA あいち経済連における診断事例紹介」と題し，正しく病害診断するためのポイント，間違いやすい診断事例について紹介いただいた。また，「若手研究員が病害診断を行うにあたっての悩み」に関連して，兵庫県立農林水産技術総合センターの村上翼氏からは，ブドウのモザイク症状やトマトのこぶ症状に関する診断事例紹介，診断業務における悩みについて，広島県立総合技術研究所の竹原有志氏からは，キク萎凋病やトマト葉腐病に関する診断事例紹介やベテラン研究員に聞いてみたいことについて講演いただいた。総合討論では，法政大学生命科学部の濱本宏氏の司会のもと，病害診断データの共有方法，人的ネットワークによる組織づくり，診断に関する情報交換の場としてのSNSの活用などについて議論した。講演を引き受けていただいた皆様と，参加者の皆様に感謝申し上げるとともに，研究会の運営にあたっていただいた，三重県農業研究所ほか関係者の皆様に厚く御礼を申し上げる。

(川上 拓)

【若手研究員国際学会参加報告①】

この度は「若手研究員国際学会参加助成」にご採択いただき，身の引き締まる思いです。報告者はドイツ・ケルンにて開催された2025 IS-MPMI Congressに参加いたしました。本学会は，微生物-植物間相互作用を分子レベルで扱う国際学会であり，報告者は「植物病原細菌における細胞間コミュニケーション機構と病原因子の関連性」について報告しました。自身の専門が細菌学であるので，特に細菌の分子機構が植物にどう影響するかという観点で多くの研究発表に注目しました。中でも，植物成長促進細菌と植物病原細菌の複雑な相互作用を扱った研究は，自身の研究遂行の上で参考になり，多くの刺激を受けました。一方，ディスカッションを通じて「細菌側の視点に偏るのではなく，



写真 第20回を迎えた2025 IS-MPMI Congressのロゴと筆者

細菌側と植物側の双方を理解することが重要だ」との指摘を受けたことも印象に残っています。今後ポスドクとして研究を進める上でこの考え方を大切に，複雑な生物間ネットワークの解明に貢献できるよう精進して参ります。

(宇都宮大学大学院 滝田和己)

【若手研究員国際学会参加報告②】

昨年7月ドイツ・ケルンにて開催された2025 IS-MPMI CONGRESSは植物病理学から共生，マイクロバイオータまで，植物-微生物相互作用分野のあらゆる研究が一堂に会するまさに祭典と言うべき大規模な国際会議でした。私はこの度，国際学会参加助成を受けて本学会で「シロイヌナズナの特化代謝物による植物内生糸状菌の病原性抑制機



写真 一緒に参加したラボメンバーと（右が氏松）

構の研究」についてポスター発表を行うことができ、実りある経験となりました。本プロジェクトは萌芽的な段階を含み、今後着実にデータを積み重ねていく必要がありますが、学会で受けた質問の内容から、固めるべき基礎、進むべき方向性が明確になりました。また、共同研究者と直接議論して代謝物解析について協力を仰ぐことができ、研究の幅を広げることができました。講演では研究の潮流を作ってきた研究者たちのトークを直接聞くことができたことが大いに刺激となり、自身の立ち位置、今後のキャリアを考える上で重要なきっかけとなりました。助成に感謝申し上げます。(東京大学大学院 氏松 蓮)

【若手研究員国際学会参加報告③】

2025年7月にドイツ・ケルンで開催された International Society for Molecular Plant-Microbe Interaction 主催の国際学会に参加し、病原微生物の認識に関わる植物受容体の探索についてポスター発表を行いました。本学会は、植物-微生物相互作用分野における主要な国際学会であり、私の専門分野である病原微生物の認識に関わる受容体の新規同定や構造解析に関する発表も多数行われていました。これらの発表を通じて最新の知見を得るとともに、今後の研究方針を考える上で大きな刺激を受けました。また、本学会では活発な議論と交流が行われ、私のポスター発表でも実験系に関して多くの有益な意見を得ることができました。本学会への参加は、自身の研究を客観的に見つめ直す貴重な機会となりました。本学会への参加にあたり日本植物病理学会から助成いただいたことに深く感謝申し上げます。

(理化学研究所 大野恵梨佳)



写真 IS-MPMIにてポスター前の筆者

【学会活動予定】

1. 2026年度大会

日時：2026年3月26～28日

場所：摂南大学枚方キャンパス（枚方市）

事務局：摂南大学

2. 談話会・研究会等

(1) 第35回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

日時：2026年3月25日

場所：摂南大学枚方キャンパス

(2) 第25回植物病原菌類談話会

日時：2026年3月28日

場所：摂南大学枚方キャンパス

(3) 第9回植物病理を紡ぐ会

日時：2026年3月28日

場所：摂南大学枚方キャンパス

【書評】

『日本農薬学会 50周年記念出版 IPM のイノベーション — 実践的で経済的な総合的病害虫・雑草管理 —』編集・執筆：山本敦司・河津圭，2025年3月11日発行，（一社）日本農薬学会，約600頁，7,000円＋税

作物保護の研究や実践の現場では、「総合防除」や「IPM（総合的病害虫・雑草管理）」という言葉が本来の意味と異なる使われ方をすることがあります。時には「IPM イコール生物的防除」「化学農薬を使わないことがIPM」といった誤解も見られます。また、「みどりの食料システム戦略」や「スマート農業」などの取り組みで、条件反射的に用語が使われることもあります。では、IPMとは何か、なぜ行うのか、どのように行うのか——この問いに的確に答えられる人は多くありません。私自身もIPMについて知識は乏しく、どこから調べればよいのか迷っていました。そんな折に本書を手に取り、IPMに関する知識が網羅されていることに驚きました。本書はIPMを一から知ろうとする人に非常に有益です。本書は一般社団法人日本農薬学会設立50周年記念として出版され、著名な研究者による体系的な知見が集約されています。読者はまず、本書のページ数に驚くでしょう。約600ページに及ぶ本書は辞典並の厚みがあり、大著であると実感できます。そして肝要な中身ですが、これが文字通りIPMの教科書と呼ぶにふさわしい内容です。IPMの基礎から最新動向、各防除法の科学的根拠と事例、関連分野まで網羅されています。

「IPM」の基礎と最近の動向（第1章）から始まり、各防除法の科学的根拠と具体例（第2章～第6章）、生態系

サービスの保全と生物多様性管理（第7章）、薬剤抵抗性管理（第8章）、コミュニケーションを含むIPMの実践（第9章）まで、IPMとそれを取り巻く関連分野を本書一冊で学ぶことができます。本書について、発売元のキャッチフレーズは、「病害・虫害・雑草のIPMが一冊でわかる。」とのことですが、非常に納得できる内容となっています。IPMの防除法の一つとして、化学的防除を本書の第2章であらためて詳説されていることにも注目しました。農業において化学農薬の開発と使用の歴史は避けて通れないことから、化学農薬の歴史や、顕在化した課題の抽出、そしてそれを努力によって改良していく道りを知ることができます。更に、化学農薬の中でもユニークな作用機構で防除効果を発揮する要素技術として、抵抗性誘導剤、害虫忌避剤、性フェロモン剤についても詳細に分かりやすく説明されています。化学農薬以外の各防除法についてみると、第1章でバイオステミュラントが紹介されているのに加え、第3章の「生物的防除」では、天敵、BT剤、昆虫病原微生物、病原菌を対象としたウイルスの開発や、植物ワクチンの利用について紹介されています。第4章の「物理的防除」では、予防を主軸とする様々な試みが示されており、気門封鎖剤や防虫ネット、振動や光（青色光や紫外光）、熱（温湯消毒や太陽熱消毒等）による物理的防除が具体例として挙げられています。土壌の還元消毒についてもこの章で取り上げられており、そのメカニズムや条件がわかりやすくまとめられています。第5章「耕種的防除」では、その個別技術として抵抗性品種・台木の利用、輪作やおとり作物を用いた被害軽減策、植生管理による害虫防除の例、作物残渣の管理、土壌改良や緑肥利用の実際等が説明されています。第6章では「総合的雑草管理」として、雑草の予防・判断・防除のプロセスによる総合管理について要点が抑えられている他、除草剤抵抗性や外来雑草についてもまとめられています。私自身、これまでに関わってきたバイオステミュラント資材の開発や紫外光による防除法等について、その背景を改めて知る機会になると同時に、他のIPMの手法についても大きく知ることができました。

本書は単なる科学的説明や事例紹介にとどまらず、経済的視点を持ち、農業現場での実践に重きを置いています。

コスト度外視の防除法ではなく、環境保全と生産者利益を両立させるIPMのあり方を示しています。また、IPMを支える基盤として、科学データの活用や生産者とのコミュニケーションの重要性についても詳述されています。

本書は研究者や農業指導員にとって必携であるだけでなく、IPMを通じてイノベーションを目指す生産者にもぜひ読んで頂きたい一冊です。学生や教育関係者、一般の方々にも、最新の病害虫・雑草管理手法を知る上で有益です。まずは多くの方々に手に取って頂き、経済的なIPMの実践に役立てて頂きたいと思います。

（農研機構植防研 藤川貴史）

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい。下記宛先まで、よろしくお願い申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ：

守川俊幸、松下陽介、佐々木信光、埋橋志穂美

編集後記

明けましておめでとうございます。新しい年を迎え、会員の皆様のご健勝と学会の益々の発展を祈念いたします。学会ニュース第113号をお届けします。本号は、北海道部会、東北部会、関東部会、九州部会、植物病害診断研究会の開催報告、また今後の学会活動の予定などの記事を掲載しました。3月には摂南大学にて本大会が開催されますので、会員の皆様には是非ともご参加いただき、学会活動を盛り上げていただきますようお願い申し上げます。（守川俊幸）
